令和４年度第４回寝屋川市男女共同参画審議会　会議録

日　　時：令和５年２月13日（月）午前10時00分～午後12時00分

場　　所：寝屋川市役所議会棟４階第一委員会室

出席委員：大委員長、林田副委員長、藤田委員、濱田委員、山﨑委員、
中林委員、榎並委員、新宅委員、吉永委員、鈴木委員、荒木委員、
橋本委員（欠席：森川委員）

事 務 局：人権・男女共同参画課 松村次長兼課長、井上

○（委員の紹介）

○（傍聴者　入場）

○委員長　　議題１「管理シートの評価について」、資料１について、事務局説明を願います。

○（資料１　説明）

○委員　　評価によってＣ区分やＤ区分になった際、何らかの対応を求められるというものですか。

○事務局　　その結果に関して、ペナルティを課すものではございません。実績の評価を踏まえ、目標設定の際に結果を踏まえた内容として特に改めた形で設定していただきたいと、人権・男女共同参画課より担当課に話をさせていただくというものです。

○委員　　つまり、ペナルティを意識せず、正直に１年間を振り返って自己評価をしていただくという目的で行っているということですね。

私はＢ案の方がいいのではないかと思います。２つ理由がありまして、Ａ案のＡ区分は十分な取組、Ｂ区分が相応の取組となっておりまして、十分と相

応は違うのだろうかというのが、もし私が自己評価をするとなれば戸惑うかなと思いました。また、達成度が50％以上75％未満というのも、半分しか達成できていないのに相応の取組の評価が得られたと言っていいものなのかと気になりました。Ｂ案のほうは、Ａ区分が十分な、Ｂ区分はおおむねということで、60以上80％未満でおおむねという表現というのは妥当なのかなと思います。

これは議論されたかもしれませんが、取り組むことと取組による効果が得られることというのは、やはり違うような気がしていまして。つまり、効果まで得られたかどうか分からなくても、掲げた目標に対して取り組んだということはどのように評価を行えばいいのかという事が気になりました。

○委員　　自己評価というのがやはり気になります。結局、その効果を出したいのはどこに対してなのかというのが、分かりづらいところです。まずは、おそらく行政の中での活動に対しての評価はこれなだと思うのですが、自己評価した後、その自己評価だけで進んでいくのか。それとも、市民にどういう効果が得られたのかということを問うのかということ。それと、あと評価という言葉が出てきていますが、その効果というのをどこで判断するのかという規準がちょっと分からないかなというふうに思っていたんですけど。

あとは、Ａ案にしろ、Ｂ案にしろ、判断基準が前回よりは細かく分かれていると思いますが、項目に対してどうなのかというところまでは出てこないのかなという。もう少し細かく何ができて、何ができていなかったのかということが分かりづらいかなと感じました。

○事務局　　様々なプランに掲載されている取組項目に関しましては、当然のことながら人権・男女共同参画課だけでは進められるものではございませんので、様々な行政分野の点に合わせたものにしております。

人権・男女共同参画課の立場といたしましては、そのようなプランに掲載されている取組、あるいは具体的な年度目標に関して、それぞれの担当課が目標の達成のためにどのような取組をしてきたのかということをまずもって自己評価をしていただいた中で、人権・男女共同参画課として数値目標などを掲げられている部分に関しては、その数値目標に対しての達成度であったり、そのような部分を確認させていただくとともに、設定した目標を達成できるように取組を強化していくのかというところで担当課と連携をとりながら実施をしていきたいと思います。

○委員長　　評価に関しては、評価シート自体は評価をつけた後、それが何でそういう評価になったのかというのと、その課題は何なのかということで来年度どうするのかというところを書くところまでが全部セットになっていたはずなんですよね。Ａ評価で担当課としてはこういう風に考えているけど、審議会としてはこれでＡ評価はおかしいという風なことを前回もお話をしたということがあります。

その点で言うと、前回全体的にＡ評価が多くて評価の甘さが目立つということで改善案を考えていただいたんですけども、この評価にしてもＡが増えそうな気がするというのがもう少し考えたほうがいいのではないかと思います。

要するに、Ａ評価が多かったというところに関しては、多くの担当課の方が十分な取組の効果が見られたんだと前回評価したというところが問題なのであって。とすると、その表現をそのまま残した形で変更案Ａ、Ｂも十分なという形で書かれているんですけど、これでもやっぱりＡ評価が多くなるのではないかと思います。

担当課が十分だと考えているけれど、審議会で考えた評価が異なる場合どのように表現するのかというところがポイントになってくるかなと思います。

一案としては、ＰＤＣＡサイクルにのっとって、Ｃ評価のであるならば、来年度の計画に向けて、あるいは来年度の展開に向けて十分な効果が見みられたという風に書くなど、Ａ評価をつけにくい状況にしておくということも必要なのかなという風に思います。

○事務局　　Ａ評価、Ｂ評価の捉え方が非常に主観的になっておりまして、担当課がその評価に至った理由などを人権・男女共同参画課として把握するように努めたいと思います。

それと、Ａ評価をつけにくくするというコメントに関しましては、再度精査をさせていただきたいなと思います。

○委員　　Ａ案もＢ案もＡ評価の曖昧さについて考える必要があるのではないかと思います。逆に、75％以上にしてしまうと更にＡ評価が増えますよね。そうすると、ここはこれに沿った対策みたいに見えないのと。

また、大きくＡ案とＢ案で違うのが、達成度で一定の問題があるとして年度目標に掲げた内容の廃止等を含むというところが40％未満なのか、25％未満なのかということで、Ａ案はそこは含まれなかった踏み込み方をしていますよね。これは何か25と40の間の15％増やしたというのは何かあるんでしょうか。

○事務局　　Ａ案の中でのＤランクとして一つのポイントとして見たのは、４つのランクをパーセンテージで表すときに25％ずつということでしておりますので、感覚的な問題かも分かりませんが分かりやすいかなという風に思い分けた次第です。

○女性委員　　達成が進んでいる部分、逆に大事な部分とか市民からの要望とかいろいろな課題があるところについて低かったというところを見えるようにするというのは一つの手だてですね。そこを数字で40％未満にするのかと

いうのは、その辺はもう一つ議論が要ると思うんですけども。一番課題なんだけれどもできていないことは何なのかという、そこを見るようにするという評価のほうがいいと思います。

○委員　　企業とかでよく自己評価をして、上司とかもう一つ上の上司と面談を行うのですが、そのとき多いのが、Ａ、Ｂ、Ｃ評価の三択か、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ評価の五択が多いんです。一般企業ですと何％というのは書いてない企業が多く、文面のほうを重視していることが多いんですよね。

なので、Ａ、Ｂ、Ｃ評価の三択であればＡ評価は私が目標としていた部分について達成ができました。だから、私はＡとつけましたみたいな感じですかね。Ｃ評価の場合は、達成ができませんでした。なのでＣとつけました。それを評価するのは上司、またはもう一つ上の上司が評価するわけですが。

今回、一番大事なことというのは、部署の中で自分たちが課題としたことがじゃあできたのか、できなかったのか。どれぐらいやり残しがあったのかというところが一番のポイントで。何％というのが問題ではなく、そちらを重視する形のほうが一般企業ではよく取り入れている手法なのでより分かりやすいのかなと。パーセンテージを出すことでより分かりにくくなってるのではないかと感じました。

○委員　　一番上の評価をもう人間の心理として、一番上の評価を減らしたかったらＡじゃなくて例えばＳとかにすればいいので。Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃにすれば、いや、Ｓというほどできてるとは言い難いけどＡかなぐらいのちょっと反省ができやすくなるのではないかと。

うちの大学はＳ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｆ評価なんですね。Ｆは落第。Ｆを一番下にしておけば、ＣとかＢとか、あ、できてないなという反省もできる。一番下って言われると怒られそうでつけづらいけれど、その上ぐらいならつけやすい、

反省できるかなみたいな。そういう心理、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄってつけるときってそういう心理が働いているような気がするので。

○事務局　　そもそもパーセンテージにこだわらなくてもいいんじゃないかというような大きく見直す案もいただいている中ではございますが、管理シートをつくり上げていく中で、評価のランクづけというのはこれまで行っておらず、新たに入れたというところでございます。ですので、考え直すのであれば、一度事務局で練り直させていただきたいとは思いますが、この評価の大きな話としてパーセンテージを見直しを行うか、御意見をいただけたらと思います。

○委員長　　確かにこれまで寝屋川市の評価シートでこうした評価というのはありませんでした。ただ、他市でそういったことをやられていて、そこに一定以上の効果があるということで取り入れてはどうかということを審議会の中で話し合って行ったというところがあります。

ただ、実際に評価を行った結果、Ａ評価が８割以上だったということもあり、これは考える必要があるのではないかと。要するに、担当課はＡ評価であるとつけているけれども、Ａ評価ではないということがこの審議会の中で出て。次年度に関してはもう少し評価にばらつきが出るような形をとったらどうかというので、今回変更案が出てきたということがございます。

そうしましたら、パーセンテージが必要なのかどうかについてはいかがでしょうか。

○委員　　数字は分かりやすいと思います。Ｓというのも、要するに大学であると90点以上なんですよね。これはなかなかつけにくいので。ばらけさせるというのが目的ではないんですけれども、Ｓで90、Ａを80とすればかなり間違いなくばらけるだろうなと思います。

現行案というのは、Ｂが40％から80％ですから７割ぐらいかなと思っても、40と一緒にされちゃ困るっていうのでＡを選んでいる担当課というのも多いのではないかと思います。

○委員　　今回、前回の疑問点からの対策で言えば、Ｂ案でいいと思います。数字的な評価がきっと必要ではないか、そこから中身が見えるようになればいいかなと思います。

○委員　　やはりパーセンテージが書いてあるほうが選びやすいかと思います。アンケートでも例えばこの商品についてすごく満足したか、やや満足、普通とか。その場合、満足化と言われればそんなに満足してないけども、でも不満でもないしなとか結構迷うんです。それで、かえってこのように何％以上と書かれていたら、自分が評価するときはやりやすいと思うんです。

それと、Ａ案とＢ案を比べて見ましたら、達成度がＢ案のほうが80％以上、これは大分満足してできたという評価になりそうで。それで、できなかったというのが達成度40％未満Ｄかなと思うんです。だから、自分で評価する場合、できた、できてないで区分して、そのできた度合いがＡＢＣのうちのどれかっていう考え方を行うと思うので、Ｂ案がいいと思います。

○委員長　　この審議会からしたら、Ａがたくさんあるよりも ＢＣを率直につけていただいて、そこでこんなことが課題になってますというものについて、率直な意見をいただけるほうが、いろいろ委員の皆様から意見も出していただけると思います。そのような点で、ＢＣをつけていただきたいというところがあったということです。

要するに、Ａをつけているが課題は多く、ただ、その課題について審議会で意見を言ってもいいのかということが前回の評価シートのときにはありました。ですので、もう少し率直につけていただくのと、Ａ評価については、もう少

し厳密な形にするということで取りまとめをお願いできたらと思います。

○委員　　確かにＡ評価の多さは多いと思います。担当課の課題や改善点を見てますと、そうじゃないだろうというものも多くありましたので。

Ｂ評価を一つの当初の目的に対して達成できたという規準にして、Ａ評価はそれをかなり上回ったという辺りで、Ｂ評価を基準にしていったら、Ｂに劣っているのがＣ、Ｄ。そして、先ほどおっしゃったＳに当たるのがＡに当たるようになってくるのかと思いました。

委員長がおっしゃったように、あくまで目的は目標を達成したではなく、さらにもっと我々の課題は高いところにあると思いますので、上を見られたらなという意味でＢ案を推奨します。パーセンテージについてはなかなか何をもって80か、40かというのが個人的には分かりにくいので出したほうがいいと思ったりもします。

○委員長　　それでは、評価については、一旦事務局と委員長で検討させていただいて皆様方に修正案をお示しするという形でよろしいでしょうか。

○（「異議なし」の声あり）

○委員長　　それでは、議題の２「若い人たちをターゲットにした男女共同参画の取組について」。事務局御説明を願います。

○（資料２　説明）

○（グループごとに討議）

○委員長　　それでは、第１グループの「セミナー・講座等の企画」のグループについて報告を願います。

○委員　　まず、テーマという話に及びまして、ジェンダー、あるいはジェンダー平等。非常に大切な言葉なので我々も大事にしていく必要がありますが、大学生の意識からいくとジェンダーという言葉よりもＬＧＢＴＱの辺りから

のほうがより身近に感じている子が多いという意見があり、こちらから学生に迫っていくべきなのではないかと。取りあえず学生の一番身近なところの言葉、ＬＧＢＴＱから入っていくという形です。

次に、やはり今までの討議のように若者が中心となって活動をしていかなければ、なかなかその次の若者や、あるいは全体に広がりを見せないといけませんので、やっぱり大学生をどのようにしてこの問題に向き合わせるのかという討議を行いました。

大学によれば、大学のように講義や、講座があるようなところもあるみたいですが、一般的に、まだ寝屋川の大学やこの辺りにはないということですので。大学の人権担当窓口がその中心となっているので、そこに教授の方や、あるいは市のほうも含めて巻き込んでいくような形の働きかけをしていかなければいけないのではないかと。

大学のメリットも考えながら、その中で学生を巻き込んでいこうと。その中で、人権講座や、学部とか学科を新設というのも一つの考えてもらう措置にしていったらどうかなと。

メリットが感じられないと学生は動かないということなので、単位として与えていくのも一つの手段ではないかと思います。自主的、自発的な形が最終目的だなとは思いますが、まずは基礎を勉強させていきたいというのもあり、道徳教育に２単位あるように、同じようにジェンダーという辺りの単位が必ず必要なんだという辺りも働きかけていってはどうかと考えていました。

その中で、学生がどんどんと参加していく中で学生と市民との交流、フリートークの時間、セミナーに来た学生にまたアピールしていくという形をつくっていって。最後、やっぱりこのジェンダーの問題やＬＧＢＴＱの問題についても、より大きな大会でたくさんの年代が参加されるような市の大会にも

働きかけていく必要があるのではないかという形で書かせてもらいました。

あと、大学生が出前講座を積極的に行ったり、学生主導のセミナー、例えば健康・スポーツの寝屋川の電通の大学でしたら、ロボットを使って障害者のサポートをどうするかというテーマがあるような形のように、このジェンダーのテーマも決めながらしっかりと学生に考えさせて、セミナーの講師を学生がしたらどうかと。あるいは、各大学の公開講座、もちろん大学の先生の講座も大事なんですけども、その一部に学生のコーナーをつくって学生に意見を言わせたらどうかと。

また、中学校や小学校に大学生を行かせて、これも大学生が小学生や中学生に語りかけるのではなく、大学生から私たちが意見を聞いているように、小学生の意見、中学生の意見を一緒に聞いて一緒に考えていくような場をつくっていくと大学生の意識も変わっていくのではないでしょうか。そのためにも、市内小学校と大学との協定みたいなのも必要になってくるのではないかと。

○委員長　　それでは、「学生とのトークの場」の報告願います。

○委員　テーマとして「学生とのトークの場」。「場」、「テーマ」、「仕掛けや工夫」という３つの項目で分けて考えました。

まずは、「場」として考えられるのがバーチャルとリアルの場、両方から攻めていく必要があるのではないかと思います。

バーチャルについて、まずはＳＮＳの利用。ＩｎｓｔａｇｒａｍとかＴｉｋＴｏｋとか。市役所のホームページであったりＦａｃｅｂｏｏｋも見ますが、今の若者はＩｎｓｔａｇｒａｍとかＴｉｋＴｏｋ、ＹｏｕＴｕｂｅくらいです。

そして、リアルな場所で自由に話してもらって、意見をもらうというような、

常設でカフェみたいなところがればいいなと思います。

ここの２つから、学生たちが自主的にサークルを立ち上げてくれたらありがたいかなと思うんですけど。つながる力が今の若者は薄いので、その辺りは大人が手助けし、そこからの主催するイベントにつながっていけば自然な流れになるのではないかというような形に「場」としてはなりました。そこには、やっぱり就活とかを絡めるほうが、より自然に入ってきやすいのではないかということです。

「テーマ」について、やはりジェンダー平等とか男女共同参画は身近な問題として感じられていないというところが一番の問題ではないかと思っています。

先ほどのお話でもありましたが、実利が絶対的に悪ではなく、やはり利益がないと続いていかないので、その辺りはこれを行うことによって就活につながるとか、その後に、じゃあそこから企業とつながって自分で起業できるよとか。若い人たちに先を示すことによって、ここから仕掛け、工夫としてこの子たちが拡散してくれたほうが、より自然な形で皆さんに浸透していくのではないかというのがグループの意見です。

テーマとして、就職であったり、アルバイトの賃金、あとは恋愛、この辺りがすごく興味を持つ大きなテーマになるので、その辺りからジェンダー平等や男女共同参画に広げていってあげるというところ。まず、私たちの大きなテーマである男女共同参画を見せるのではなくて、本人たちが興味のあるものからだんだん裾野を広げていってあげるというほうが自然に広がっていくのではないかという話になりました。

○委員長　　「既存イベント等を活用した企画」発表願います。

○委員　　「既存イベント等を活用した企画」についてですが、寝屋川市で行

っているイベントの中で学生が無料でブースを出せるようなところがないかというところに焦点を当てて具体的な話を行いました。校区の規模で行っていたり、コミセン祭りであったり、敬老祭り、そういったところであれば、場所代はどうやら無料で行っていただけるみたいで。農業祭であったり、文化祭のような大きなイベントになると場所代でお金をとられることもあるということなので。そういうところに無料で出店をしていただいたらいいんじゃないかなという風なところになっています。

特に、大学の校区やコミセン、地域のそういうところに働きかけを行っていけばよいのではないかと。

なので、場所をどうやって提供するかということに特化はしてしまいましたが、そういうお話でまとまりました。

○委員長　　３つのグループとも極めて具体的な提案があったかと思いますので、これを事務局で取りまとめて、取りあえずは来年度できることを始めていただきたいかなと思います。

最後に、議題のその他を、事務局御説明願います。

○事務局　　（その他説明）

○委員長　　それでは、以上をもちまして本日の審議会は閉会といたします。